子どもたちの発達からとらえる養護教諭の関わりと保健室の役割

～保健室来室記録から見えてくる子どもたちの姿～

養護教諭　石　川　世津子

はじめに

満開のさくらの季節、幼稚園の幼い子どもたちと出会い…。小さな、小さな人間が、走り回って、笑い合っている。遊びまわる小さな体の中、いっぱいに満たされている弾む心。

私にとって、幼児との出会いは、驚きと、感動の瞬間だった。

「先生、（幼稚園に行くことは）ご褒美だよ。」そんな言葉で、私を送り出してくれた前任地の中学生の子供たち。「もう一度　幼稚園（こども）に戻りたい…。」そうつぶやいた保健室来室の生徒。成長した体の中に、満たされぬ心を今も持ち、繰り返し繰り返し、保健室を訪れる、多くの子供たち。いったい何を満たしきれず・獲得せずにこの子たちは、成長してしまったのだろうか。

人間形成の基礎を培う幼児期の、発達の芽生えに目を向け、プロセスを追っていきながら、子どもたちが、私（養護教諭or身近な保育者以外の大人）に、どのような時、何を求めてきて、それにどう関わったかを、保健室来室記録から捉えることにより、養護教諭の関わりと、保健室の役割を探っていきたいと思う。

Ⅰ　保健室来室記録について

月　　日　　曜日　　℃　　○○○ 行事
要　　件…怪我の手当・具合が悪い・付き添い・お話・何となく・困り事・連絡・用事 来室時間…年少、年中、年長に分け、固有名詞で、時間事に記録、異年齢で来室した時は、記号＝などで記入 気 づ き…表情、表現、どういうことを感じているか、など、何でも記入。

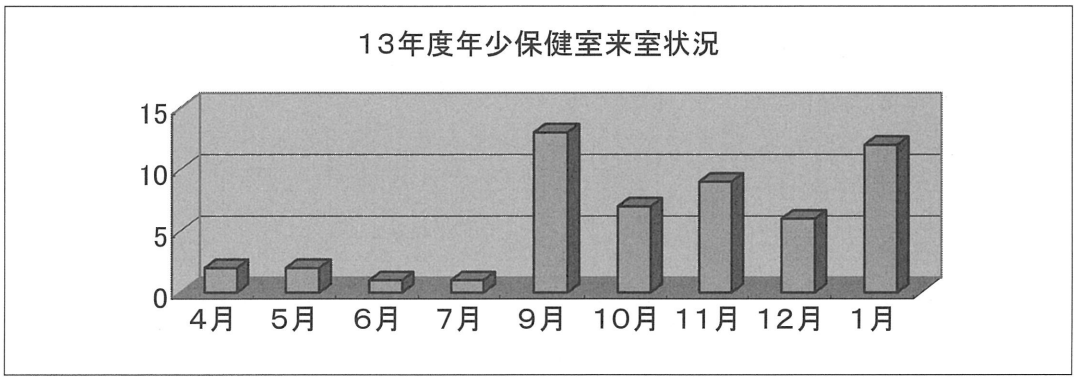
○当初は保健室にやってくる幼児を、おもしろく（新鮮に見え）思い、メモ書きのつもりで記録していたが、遊びを中心に展開される子どもたちの日常の中で、保健室の中にいる養護教諭ではなく、時として、園内にいる担任以外の大人、歩く（移動）保健室としての気づき、子どもたちとの関わりも記録していった。

○来室の要件は、《12年度保健室における子どもたちの実態》をふまえ、〈怪我の手当〉・〈具合が悪い〉・〈付き添い〉・〈お話〉・〈何となく〉・〈困り事〉・〈連絡〉・〈用事〉・の８つに分けた。

○幼い子供たちは、自分の体の状況を、表現することが難しく、内科的な理由や、心的理由のために来室しても、〝要件〟としての記入が難しいときもある。そのため、固有名詞で記録した子どもたち全てを要件に分類していない。

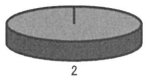
Ⅱ　実践と気づき

☆　時期時期の発達課題への関わり　　～年少児との関わりより～



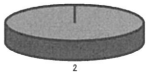
	怪我の手当	具合が悪い	付き添い	お話	何となく	困り事	連絡	用事	合計
4月	2								2
5月	2								2
6月	1								1
7月	1								1
9月	3		10						13
10月	2		4		1				7
11月	2		3				4		9
12月	2					3	1		6
1月	4		2		1	1	4		12

4月来室状況内訳



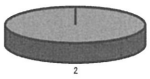
④保育者（担任）に抱きかかえられて来室。
痛いのと、不安で「おかあさん、おかあさん」と泣く。「痛いね・・いたいね。」と保育者は、膝に抱き、抱きしめながら声をかけていく。
　落ち着くのを待って処置。

5月来室状況内訳



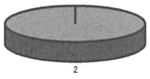
⑤打撲により来室
保育者と手をつないで来室。保育者は膝の上にD児を抱き、打撲部位を声をかけながらさすっている。
　養教、保育者の手に手を重ね一緒に声をかけながらD児をなでる。
　廊下で数名・年少児見ている。

6月来室状況内訳



⑥年長組に姉のいるA子何となく来室。
養教に話しかけてくる
　廊下で数名・年少児見ている。

7月来室状況内訳

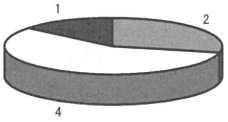


⑦A子来室。保健室の中、探検（？）、「これなあに・・」と聞く。A子養教の返事に関心はなさそう（話すだけでいい様子）
　廊下で数名・年少児見ている。
（会話を興味を持って聞いている。）

9月来室状況内訳

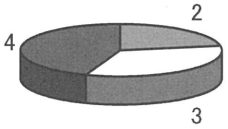
⑨打撲したＴ児に、Ｋ児、Ｂ児、付き添ってくる。
（Ｔ児のそばで、養教の動きを見ているだけだが、とっても関心を持って見ているように感じる。）
　この頃（９月中）より怪我一人に付き添い児数名ついてくる。

10月来室状況内訳



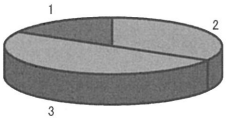
⑩この頃（10月初旬）より、怪我一人に、付き添い児数名。
（養教の動きを、とても関心を持って見ている）
・怪我した子への寄り添い方、接し方が、保育者そっくり。
・保育室で担任に、自分の怪我を言いに行く。
・教生（身近な大人）に「カットバンを貼って」と言いに行く。

11月来室状況内訳



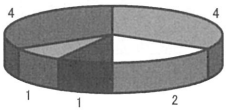
⑪養教が保健室に帰ってみると、打撲したT児にK児、寄り添い「いたいね・いたいね」となでている。その姿は、担任そっくりまねをしている。
・T児、「Kちゃんが大変なの・・」と呼びに来る。
・付き添いH児、仲良しのお友達の怪我を「なおしてね、なおしてね」と泣く。
一緒に遊んでいたお友達の怪我に対して、この時期、それぞれが役割分担のようなことをしながら、養教に伝えている。
☆子どもたちの動きから、養教の役割を子どもたちが認識しているのがわかる。

12月保健室来室内訳



⑫怪我をしても、自分一人で保健室にやって来る子も出始める。
・F児お気に入りの玩具が壊れたため（けがした？）「なおして」とやって来る。
・担任が、他の子に関わっている時、困り事があると、養教のところへ来る。

1月保健室来室状況



①一緒に遊んでいたお友達の怪我に対してそれぞれが役割分担をしている。
・困り事で来室する子も、目的がはっきりしてきた。
（Ｆ児、壊れた玩具を直してもらいに、事務室に行く。）
・保健室でのお約束を子ども同士で伝え合う姿が見られる。

・家族を中心にした生活から、友達集団の中での生活に初めて入ってきた三歳児の、保健室への関わりを拾い上げていくことにより、子どもたちが、保育者との信頼関係の深まりと共に、安定し、保育者をよりどころにし、まわりを見て、まねて、子どもなりに考え、様々な出来事を乗り越え、学んで行く姿が見えてきた。

今年度の、３歳児の子供たちにとって、保健室という場は、入園当初から、保健室の役割を教えられたところでなく、子どもたちに心のゆとりが出てきた頃（９月初旬）から、関心が生まれ、保健室の役割を知り、友達の怪我や、自分の困り事が起こったとき、その解決を求めて保健室に来室するようになった。このように、保育者との関わりの中で、安心感と、信頼感を持っていく過程をたどって、自ら、足を運んできた場である。

この事例より

○　まず、私（養教）自身が子供たちの信頼に答えられる大人であること。

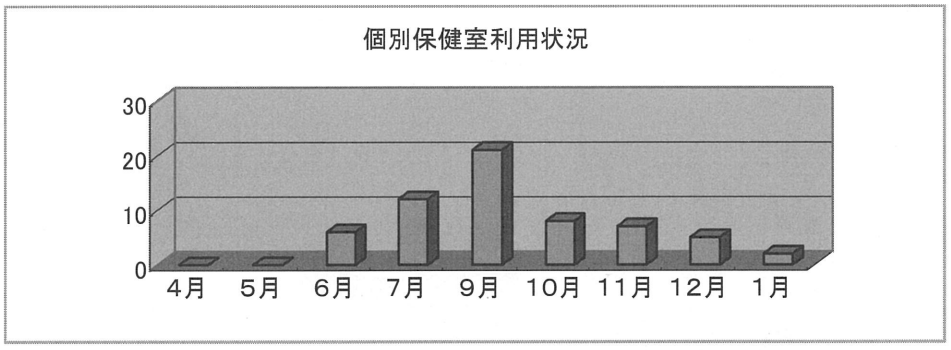
○　来室する子ども一人ひとりと真剣に向き合い、その子が求めるものを感じて、対応していくこと。

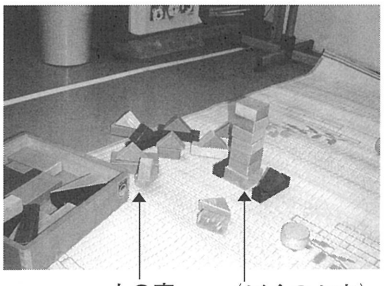
○　子どもが必要に応じて、いろいろな役割意識を持ち来室してきたことの意味を理解しながら、それぞれに応じた返し方で、その子の心情に働きかけること。

○　怪我、病気などの当事者だけでなく、当人を気づかって、一緒に来た子どもの気持ちを受け入れ、認めていくことによって、友達を思いやり、自分なりに行動していく力を育むように関わっていくこと。が大切であると感じた。

保健室で、身近な大人の一人として、信頼感を深め、安心感を広げることにより、子ども自ら、さらに関心のあること（遊び）に向かって行こうとするのではないだろうか。

☆　個有の発達の課題への関わり　　～保健室来室の多い、個との関わりより～





月		理解 J児実態	どういう支援・関わりをしていくか（方針） 本人への関わりと気づき	担任・他の教職員との連携	
4	初	・登園直後より事務室でお絵かき・折り紙をしている姿 ・初めて養教が話しかけた時、強い緊張感を現し、動きを止めた。養教が去った後、「だれ？」と、事務員さんに聞く。	・初めての関わりであることから・・「おはよう。Ｊちゃんって言うんだ・・よろしくね。」と言葉をかける。その後、事務室で姿を見かけるたびに、、お絵かきを話題にしながら、話しかけたり、折り紙を見せてもらい「へー、おもしろい物作ったねー、すごいね！」など、Ｊ児との関わりを持つようにした。 ・Ｊ児が返事をする前に、必ず事務員さん、校務員さんを見ることなどから、場所としての事務室と、そこでの大人との関わりを、本児がよりどころにしていることに気づく。 ・Ｊ児と、事務員さん、校務員さんとの話題に加わることにより、Ｊ児との話題の共有、場の共有、思いの共有を図るよう関わる。	・「事務室にいつもいる子・という、わからない子どもについて、教えて・・。」と担任に聞くことにより、Ｊ児が年少時から、事務室を一時の居場所にしていたこと、前担任から引続き、新しい環境の中で、不安定なＪ児を見守ってる事を知る。 ・集団の場では、担任に、しがみつくことはないが、膝の上や、ぴったりくっつく姿が見られることを聞く。 ・事務室でのＪ児の様子を担任に伝える。	※受容・傾聴 ※担任との共通理解
	中 下	・安定した、一時の居場所（事務室）より、担任に連れられて、集団の場（お帰りなどのお集まり）へ向かうとき、顔を横に向け、目をつり上げた表情をする。			
5		・事務室のドアが開くたび、緊張を現していたが、このころより、ドアに背を向けて座り、折り紙をしながら、お話ししたり、ひととき自分の世界で遊んだ後、庭に出て、ひとりで自転車に乗る姿が見られるようになってきた。	・「なんだ、石川先生か・・」 「たんぽぽさんの先生かと思ったんでしょう。残念でした。」など、会話の中に、担任を意識した言葉を入れていく。	・担任の姿を追っている様子を伝える。 ・Ｊ児の選んだ場（事務室）への関わり。	※他の職員との連携
	中	・クラス環境の変化により、再び、事務室との関わりを深める。	・事務室で姿を見かけるたびに、、お絵かきを話題にしながら、話しかけたり、折り紙を見せてもらい「今度は、こんな物作ったんだ・・Ｊちゃんって、いろんな事出来るんだねー」など話しかけ、Ｊ児との関わりが深まっていくよう配慮する。しかし、「たんぽぽの　○○ちゃんも、☆☆していたよ」など子どもたちや、担任とふれあわせようとすると、とたんに距離を置こうとする。	・新担任の願いを聞く	※**Ｊ児とのリレーション《信頼関係》づくり**
6	初	・登園を行き渋るため欠席、との連絡が保護者からはいる。		・担任と保護者の話し。	※Ｊ児の実態と担任の願いのあゆみよりを模索
		・登園後、担任と１：１でふれあい（絵本を読んでもらう）、その後、事務室で、お絵かき、折り紙、お話しをして過ごす。	・担任に読んでもらった本を持ってきて、「☆☆の本を読んでもらったよ。」と事務室で話しかけてくる。「○○先生に読んでもらったんだ、よかったね。」と返すと・・「お膝の上でね。」と言う。	・担任の願いを聞く ・登園後、担任とＪ児とのふれあい。	
	下	・４月以来、初めて保健室に来る。保健室入り口、本棚の角に小さく固まって座っている。しばらくそのまま座った後、事務室へ行く。 ２日～３日、登園・保育者と過ごす→保健室又は事務室→お集まり・降園が続く。保健室では、座ったままか、養教の動きを見ている。	・「おはよう、Ｊちゃん。今日も、あえてうれしいわ。」「・・・・・。」	・事務室での様子を聴く （Ｊ児の様子をたびたび聴く）	
		・「積み木がしたい。」と言う。部屋の入り口、本棚の角。体で囲うようにして場所を作り、小さく高く、上にとがった形に積み上げる。一つ作っては、養教の顔を見る。そして積み木を壊す・・を繰り返す 「こわしていい？」と言うので、「Ｊちゃんが壊したかったら壊してもいいよ。」と言うと、「がおぉー！！」といいながら、足で蹴散らし壊す。その姿がおかしく養教が笑うと、Ｊ児初めて、大声で笑う。	・保健室に来だしてから、初めて自分で動き出す。 ・Ｊ児が作っている間、その仕草を、見守るようにする。 ・Ｊ児のそのままの姿を受け入れ、見守る。		※受容・傾聴による身体症状の緩和 ※**受容・傾聴・共感し、感情を共有しながら関わりを大切にし信頼関係を深めていく**
7	初	・保健室に、他の子どもたちがいない時、日に１～２回　来室。 積み木、お絵かき、折り紙、工作をして過ごす。 （この間、同年齢、異年齢の子どもの、来室があるが、関わることなく過ごす。遊びに夢中のあまり、周りが見えないのではなく、Ｊ児の緊張状態が、他の子を受け入れられないように感じられる）	・Ｊ児の来室を受容し、せかさず、ゆっくりと対応する。	・事務室での様子を聴く （Ｊ児の様子をたびたび聴く） ・保育研究の時、Ｊ児について話題となる。	
		・折り紙をしながら、お話をする。「・・おとうさんときたよ・・」「○○○（Ｊ児弟）が泣いたの・・」など。Ｊ児と家族の話。	・幼い表現、切れ切れの言葉であるが、折り紙遊びをしながら、Ｊ児の緊張感が解け、言葉（思い）が流れ出てきているように感じる。・「お父さん来たの。」・「○ちゃん泣いたんだ・・」と、ゆっくり合図地をうちながら、思いをくみ取れるよう聴く。		※**Ｊ児の個有の発達課題を探る**
	中	・保健室に他の子（同年齢・異年齢）が居ても、そっと入ってきて遊んでいく。共有はしない。作った折り紙、お絵かきは、お母さんのプレゼントに持って帰る。	・Ｊ児といっしょに、書いたり、貼ったり、切ったり、笑ったり、驚いたり、・一緒に楽しみ、感動したりする。		

		・積み木で、『僕のお家』をつくる。 〈別紙　写真参照〉 ・一人遊が充実し深まっていく。	・Ｊ児と家族の絆、Ｊ児への強い期待（？）・Ｊ児が常に親（大人？）より求められている願いと、それに答えていくことで、自分を愛してもらえると思い、願いに答えてきた姿。 ・・・Ｊ児は、願いに答える姿ではなく、ありのままの自分を受け入れて欲しいのでは・・・。		※ 本質の肯定 受容　・傾聴・共感・共有
	下	・遊びを通して、他の子どもとの関わりがでてくる。（積み木・年中） ・お絵かきを、ボードに「貼って」と言う。 ・年長の遊びをまねてみる。 ・保健室でお手伝いをしてくれる。（初めは、養教のお手伝い。・・徐々に、他の子の困り事への援助へと変わっていく） ・子ども同士の関わりの中で、「いやだ・やめて」などの言葉が出てくる。 ・いたずら・悪さ・が始まる。 （初めは、Ｊ児が本来持っている、いたずら心が出てきた様な、いたずら。徐々に、見て学んだような、悪さを、時々表現してくる様になってくる。）	・Ｊ児が他の子どもとの関わりの中で、困った事、嫌な事などに対した時、遊びが止まるときがある。その様な時のみ、援助していく。 ・僕の作った物も貼って・・と言う思いと、作品を通して、他の子に僕を見て・・と言うＪ児のメッセージを感じる。 ・他のこの姿をまねてみる事から、保健室の中という狭い空間ではあるが、その中で、他の子どもたちとの関わりにおいて、Ｊ児の安定した心情を感じる。 ・Ｊ児のやりたいことを、大目に見ながら、肯定的に認め温かく見守る ・おおらかに受け止める一方、 他の子と同じように、厳しくいさめることもある。が、Ｊ児の気持ちの中に、悪さを繰り返すことにより、信頼感を試している様な（これでも僕を見捨てない？）思いを感じる。		※ スキル訓練 援助・支援 ※ 有能感・達成感への支援 ※ 本質の肯定により、安心感・信頼感を育む
9	初	・保健室来室・・いたずらから始まる。 ・保健室来室した他の子どもたちとの関わりから、遊びが外（広がりを持ってくる）へ向かっていく。 一人遊び→他の子と一緒に 一諸に遊びたいと思う子のまね→一緒に遊ぶ 遊びたい子を探しに保健室へ→一緒に遊ぶ ・養教との関わりも、７月、一月分の関わりを短いスパンで繰り返す。	・２学期スタート、そこから始まったのね・・・という感じ。怒るより先に、おかしくて笑うほかない・・。 ・繰り返しの中に、Ｊ児とＪ児のありのままの姿を受け入れる大人との関わりが、揺るぎない信頼と愛情を感じさせ、安定させることにより、(自分の力を出したいという欲求が生まれ)Ｊ児が本来持つ力が育ち、それを保健室という場で出会った小集団の中で確かめ 、自信を持ち、より広い場で（集団の子どもたちの中)、自分を表現できるようになっていったのではないかと気づく。	・事務室での様子を聴く （Ｊ児の様子をたびたび聴く）	
	中	・登園後、担任と一緒に過ごしその後すぐ、同じクラスの子どもと、園庭で遊ぶ。事務室・保健室来室なし		・Ｊ児と教育実習生との関わりを担任配慮	
	下	・頑張っているけど、ちょっとくたびれたの・・という感じで時々来室。積み木、お絵かき・折り紙を少しした後、遊びに向かっていく。（時には、教育実習生を案内してくる。）	・Ｊ児の来室を受容し、言葉に耳を傾ける。		
10		・遊びの途中で時々来室 ・遊びと遊びの間に、事務室・保健室での関わりを入れている姿が見られるが、ほんの一時、ふれあった後、遊びに向かっていく。	・遊んでいる内に、他の子どもとの関わりの中で生じたストレス、緊張、不安を、安定させるために来室するのではないかととらへ、Ｊ児の来室を受容し、言葉に耳を傾ける。但し、保健室で遊び込むことがないように配慮する。	・事務室での様子を聴く	※ 受容・傾聴 共感　共有
11		・遊びの途中で時々来室 ・遊びと遊びの間に、事務室・保健室での関わりを入れている姿が見られるが、ほんの一時、ふれあった後、遊びに向かっていく。 ・保健室と事務室の役割が、Ｊ児の中で分かれて来る。	・遊んでいる内に、他の子どもとの関わりの中で生じたストレス、緊張、不安を、安定させるために来室するのではないかととらへ、Ｊ児の来室を受容し、言葉に耳を傾ける。 ・遊びに向かう前の一時の居場所としての事務室・集団の中の出来事に対して、困り事、心配事、すごいことなどを聴いて欲しいときに来室する保健室・・なぜ、今Ｊ児が来室（養教・大人）したのか、何を求めているのかを感じれるように話を聴き、Ｊ児の心情に共感し、答えていく。	・事務室での様子を聴く	
12		・子ども同士で遊ぶ姿、おもしろいこと、楽しいことを友達との遊びの中で見つけていく姿。 ・事務室での一時と、集団での自分との折り合いを付けていく姿。	・なぜ、今Ｊ児が来室（養教・大人）したのか、何を求めているのかを感じれるように　話を聴き、Ｊ児の心情に共感し、答えていく。	・事務室での様子を聴く	※ 自信を持ち、J児が自分を表現することが出来るように支援する
1		・自分が出来る様になったことを見せに来る（こま）	・Ｊ児の良さを認め、励ます。		

・子どもたち一人ひとりには、それぞれの家庭や、家族、身体的発達や、健康、気質（性格）や能力など、個有の発達の課題を持っている。時期時期の発達課題と、個有の発達課題の、両者の解決（乗り越え？？）が健やかな発達につながるのではないか。積み上げても、支えても、崩れていく心とは、幼児期のどこかで、両者の、発達の課題を乗り越えられずに、成長した姿ではないだろうか？

Ｊ児との関わりの過程において、私（養教）が、常に持ち続けた思いは、今、その瞬間のＪ児を理解していきたいという思いだった。ありのままの姿を受け入れ、幼い言葉のつぶやきの中から、言葉でない表情・行動という表現の中から、彼の思いを聴き、喜びや、楽しさ、悲しみ、などを、共に感じ、その時々の姿に、思いを返していく。繰り返し、受容、傾聴、共感、共有していく関わりの中で、Ｊ児は安心感を持ち、何をしようかと、考え始め、自ら行動していったように思う。

Ｊ児への、気づきや、関わりは、私（養教）一人の気づきではなく、担任の気づきでもあり、幼稚園全教職員の気づきではないかと思う。共通理解とか、連携ということも、「今日、○○ちゃん、☆☆だっったよ…。」という何気ない日常の会話の中で、その子により多くの目が向き、その子の声（言葉・表現）に耳を傾け、姿をとらえ（見守り）、子どもは、自分を見つめてくれる温かい思いを感じる中で、心を開き、自分を出していくのではないか。

わかってもらえる、わかろうとしてもらっていると感じるだけで、安心感（信頼）が生まれ、子ども自ら、自分本来の姿で、歩んでいくのではないか…。私（養教）の気づきは、一方向からの気づきではあると思うが、それを言葉に出し、たくさんの職員で、それぞれの立場（専門性）を通して、いろいろな見方で子どもを捉えることにより、ひとりの子どもの理解も深まっていくのではないだろうかと、思っている。

おわりに

○おもしろい…、ふしぎだ…、なんでこうなるの??　わくわくして、どきどきすることが、私のものの見方、捉え方……。

子供たちの姿から、様々なことを学び、（子供たちに教えられ）、私自身を丸ごとそのまま受け入れてもらえた幼稚園の一年。気づき、と、記録の寄せ集めから、何とか、何かを見つけたいと思いました。養護教諭として、養護教諭の役割をどう考え、幼稚園の中で、保健室のあり方をどう位置づけるか、養護教諭としての職業的アイデンティティをしっかり持つことにより、子供たちが見え、教えてくれるのではないかと思っています。